

南インドにおける日常生活と共存したマングローブ 共同資源管理手法に関する研究

荻野 雄介

キーワード： マングローブ、地域の暮らし、マングローブ共同管理、教育、代替生計手段

1. 背景

マングローブは、熱帯もしくは亜熱帯に特徴的に見られる生態系の一つであり、海水と淡水が混ざる汽水域に生息する特殊な動物相と植物相によって構成されている。マングローブ資源は、地域の住民の暮らしと密接に関わっている一方で、地球規模の人口爆発や沿岸域における人的な圧力により、世界中でマングローブの生息面積が減少している。このことから、マングローブ衰退の原因を明らかにし、マングローブの生態系を保全すると共に地域住民の暮らしと共存した管理手法の開発が求められている。

2. ピチャワラムにおけるマングローブ管理に対する地域住民の認識

ピチャワラムは、インド南部のタミルナドゥ州に位置し、1400ヘクタール以上にわたりマングローブ林が密集している。このマングローブ林の存在によって、周辺の多くの村では2004年に発生したインド洋津波による被害が軽減されたことが報告されている。これらのことから、マングローブの生産的役割だけでなく、自然災害からの防護的な有効性についても、地域住民のマングローブに対する認識は大きく変化した。本研究では、マングローブに対する認識と管理について住民に対しアンケート調査を実施した。調査は2007年と2008年に実施し、総サンプル数は401であった。アンケート結果から、彼らが自発的にマングローブ管理に働きかけようとする意識は依然として低く、またマングローブが地域の関心事として挙げられることが少ないということが明らかになった。これは、マングローブの所有が政府にあるため、地域が主体となってマングローブの管理に参加・貢献することは難しいという、彼らの認識に起因していると考えられる。

3. 結論

長年にわたる政府やNGOなどの外部組織による植林・管理活動によって、ピチャワラムのマングローブの面積は衰退前と同程度までに回復した。しかし、人口増加や土地利用の変化などマングローブに負の影響を与えかねない要因を考慮すると、マングローブの管理は地域と外部組織との両者が適度に権力と責任を持ち合って共同で行われるべきである。本研究では、このようなマングローブ共同管理を実行するにあたって、1.地域社会の逼迫した生活の向上と、地域内でのキャパシティー・ビルディングに取り組む必要性、2.住民の暮らしの改善において、エコツーリズムやカニの肥育などを代替的な生計手段としてマングローブを活用する提案、3.子供に対する教育や大人を対象とする意識高揚プログラムを通じて、マングローブの自発的保全活動に対する認識の向上、4.地域に根ざしたグループを形成し、そのグループが主体となって地域社会からの内発的な取り組みを促進すると共に外部組織との関わりをスムーズに進める役割を担うことを提案した。